

次の文章は『源氏物語』（夕霧の巻）の一節である。三条殿（通称「雲居雁」）の夫である大將殿（通称「夕霧」）は、妻子を愛する実直な人物で知られていたが、別の女性（通称「落葉宮」）に心奪われ、その女性の意に反して、深い仲となつてしまった。以下は、これまでにない夫の振る舞いに衝撃を受けた三条殿が、子どもたちのうち、姫君たちと幼い弟妹たちを連れて、実家へ帰る場面から始まる。これを読んで、後の問い（問一〜六）に答えよ。

三条殿、「限りなめり」と、『さしもやは』とこそ、かつは頼みつれ、『まめ人の心変はるは名残なくなむ』と聞きしは、まことなりけり」と、世を試みつる心地して、<sup>(7)</sup>いかさまにしてこのなめげさを見じ」と思しければ、<sup>(注1)</sup>大殿へ「方違へむ」とて渡り給ひにけるを、<sup>(注2)</sup>女御の里におはするほどなどに対面し給うて、少しもの思ひ晴るけどころに思されて、例のやうにも急ぎ渡り給はず。

大將殿も聞き給ひて、「さればよ、いと急にものし給ふ本性なり。この<sup>(注3)</sup>おとども、はた、おとなおとなしうのどめたるどころさすがになく、<sup>(注4)</sup>いとひききりに、<sup>(注5)</sup>はなやい給へる人々にて、『めざまし、見じ、聞かじ』など、ひがひがしきことどもし出で給うつべき」と、驚かれ給うて、<sup>(注6)</sup>三条殿に渡り給へれば、<sup>(注7)</sup>君たちも片へはとまり給へれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける、見つけて喜び睦れ、あるは<sup>(注8)</sup>上を恋ひ奉りて愁へ泣き給ふを、<sup>X</sup>「心苦し」と思す。

消息たびたび聞こえて、迎へに奉れ給へど、御返りだになし。「かくかたくなしう軽々しの世や」と、ものしうおぼえ給へど、おとどの見聞き給はむところもあれば、暮らしてみづから参り給へり。<sup>(注9)</sup>「寝殿になむおはする」とて、<sup>(注10)</sup>例の渡り給ふ方は、<sup>(注11)</sup>御達のみさぶらふ。若君たちぞ乳母に添ひておはしける。

A 「今さらに若々しの御まじらひや。かかる人を、ここかしこに落とし置き給ひて、など寝殿の御まじらひは。ふさはしからぬ御心の筋とは年ごろ見知りたれど、さるべきにや、昔より心に離れがたう思ひ聞こえて、今はかくくだくだしき人の数々あはれなるを、『かたみに見棄つべきにやは』と頼み聞こえける。はかなき一ふしに、かうはもてなし給ふべくや」

と、いみじうあはめ恨み申し給へば、

B 「何ごとも、『今は』と見飽き給ひにける身なれば、今、はた、直るべきにもあらぬを、『何かは』とて。あやしき人々は、思し棄てずは嬉しうこそはあらめ」と聞こえ給へり。

C 「なだらかの御答へや。言ひもていけば、誰が名か惜しき」とて、強ひて「渡り給へ」ともなく、その夜は独り臥し給へり。

「あやしう<sup>(注12)</sup>中空なるころかな」と思ひつつ、君たちを前に臥せ給ひて、かしこに、また、いかに思し乱るらんさま思ひやり聞こえ、やすからぬ心づくしなれば、「いかなる人、かうやうなること、をかしうおぼゆらん」など、<sup>Y</sup>もの懲りしぬべうおぼえ給ふ。

明けぬれば、「人の見聞かむも若々しきを、『限り』とのたまひは。てば、さて試みむ。

<sup>(注13)</sup>かしこなる人々も、<sup>(イ)</sup>らうたげに恋ひ聞こゆめりしを、<sup>エ</sup>選り残し給へる、『様あら

む』とは見ながら、思ひ棄てがたきを、ともかくもてなし侍りなむ」と、威し聞こえ給へば、「すがすがしき御心にて、この君たちをさへや、知らぬ所に率て渡し給はん」と、あやふし。

姫君を、(7) いざ、給へかし。 見奉りにかく参り来ることもはしたなければ、常にも参り来じ。かしこにも人々のらうたきを、同じ所にてだに見奉らん」と聞こえ給ふ。まだいといはけなくをかしげにておはす、「いとあはれ」と見奉り給ひて、「母君の御教へにな叶ひ給うそ。いと心憂く、思ひとる方なき心あるは、いと悪しきわざなり」と、言ひ知らせ奉り給ふ。

(注) 1 大殿——三条殿の父(本文では「おとど」)の邸宅。

2 女御——三条殿の姉妹。入内して宮中に住むが、このとき、里下がりして実家(大殿)にいた。

3 おとど——三条殿の父。

4 いとひききりに——ひどくせつがちで。

5 はなやい給へる人々——派手にふるまって事を荒立てなさる人たち。「はなやい」は「はなやぎ」のイ音便。

6 三条殿——ここでは大将殿夫妻の邸宅を指す。

7 君たち——大将殿と三条殿の子どもたち。

8 上——三条殿。

9 寝殿——寝殿造りの中央の建物。女御の部屋がある。

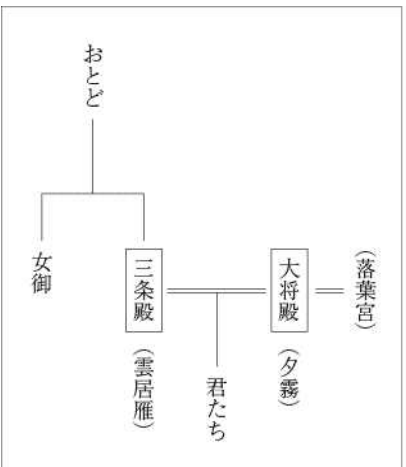
10 例の渡し給ふ方——三条殿が実家でいつも使っている部屋。

11 御達——女房たち。

12 中空なる——落葉宮には疎まれ、妻には家出されるという、身の置き所のない様。

13 かしこなる人々——大将殿夫妻の邸宅(三条殿)に残された年長の息子たち。

人物関係図 主要登場人物は□で囲んだ。  
( ) 内は通称。





問三 傍線部X『心苦し』と思す」とあるが、誰<sup>だ</sup>が、どのように思っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 三条殿が、姫君と幼い子どもたちを実家に連れてきたものの、両親の不和に動揺する子どもたちを目にして、愚かなことをしたと思っている。
- ② 三条殿が、我が子を家に置いて出てきてしまったものの、子どもたちが母を恋い慕って泣いていると耳にして、すまないことをしたと思っている。
- ③ 大将殿が、三条殿にとり残されてしまった我が子の、父の姿を見つけて喜んだり母を求めて泣いたりする様子に心を痛め、かわいそうだと思っている。
- ④ 大将殿が、置き去りにされた子の、母に連れて行かれた姉妹や弟をうらやんで泣く姿を見て、我が子の扱いに差をつける三条殿をひどいと思っている。
- ③ 姫君たちが、父母の仲たがいをどうすることもできないまま、母三条殿の実家に連れてこられ、父のもとに残された兄弟たちを気の毒だと思っている。

問四 傍線部Y「もの懲りしぬべうおぼえ給ふ」とあるが、このときの大將殿の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 三条殿をずっと実家に居座らせるわけにもいかず、一方でおとなしく自邸に戻りそうにもないので、どうしてこんな女を良いと思ったのかと、三条殿をいまいましく思っている。
- ② 三条殿には出て行かれ、落葉宮は落葉宮で傷ついているだろうと想像されて、心労ばかりがたまるため、恋のやりとりを楽しんでいる人間の気が知れないと、嫌気がさしかけている。
- ③ 眠っている我が子の愛らしさに、この子を残して家を出て行った三条殿の苦悩を思いやって心が痛み、自分はつくづく恋愛には向いていないのだと悟り、自分の行動を反省している。
- ④ 落葉宮と深い仲になったものの、不思議と落葉宮と三条殿との間で心が揺れ、三条殿の乱れる心の内を思うと気持ちが落ち着かず、自分の行動を後悔して、死にそうなほど苦悩している。
- ④ 落葉宮を愛していても、三条殿がいる限り先が見えず、落葉宮も現状に悩んでいるかと思うと心穏やかでなく、世間の目も気になって、三条殿との生活が嫌になり、別れたいと望んでいる。

問五 本文中の会話文A～Cに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① Aは大将殿の言葉で、三条殿の年がいのなさを責め、多くの子をなすほど深い仲なのに、少しの出来心ぐらいで実家に帰るなんてと非難している。Bは三条殿の言葉で、大将殿のお心が離れた自分は変わりようもなく、何をしようと勝手だ、子どもたちのことは後はよろしくと言っている。

② Aは大将殿の言葉で、子どもたちをほったらかして女御のもとに入り浸っている軽率さをたしなめ、子育ての苦労ぐらいで実家に帰る無責任さを非難している。Bは三条殿の言葉で、浮気者との間の子を育てるのに今は飽き飽きしており、子どもたちはそちらで世話してくださいと言いつ返している。

③ Aは三条殿の言葉で、年がいもなく恋にうつつを抜かして子どもたちのことを忘れていると大将殿をなじり、親のくせに無責任ではないかと非難している。Bは大将殿の言葉で、私の気持ちはもはやもとに戻りそうにないが、子どもたちだけは見捨てずにいてくれれば嬉しいと応じている。

④ Bは三条殿の言葉で、大将殿に愛想を尽かされた自分であるし、今さら性格を直すつもりもない、私のことはともかく、子どもたちだけは面倒を見てほしいと言っている。Cは大将殿の言葉で、三条殿の言い分に理解を示して機嫌をとりつつも、最後には、私の名誉も考えてほしいと頼んでいる。

⑤ Bは三条殿の言葉で、私に飽きたあなたのお気持ちがおもはやもとに戻るはずもなく、お好きになさればよいが、子どもたちへの責任は負っていただきたいと言っている。Cは大将殿の言葉で、穏やかなお返事ですねと皮肉をにじませつつ、このままでは、あなたの名折れになるだけだと反論している。

問六 この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 三条殿は、心変わりしてしまった大将殿に絶望して実家に戻り、おとどと語ることで、やっと「少しもの思ひ晴るけどころ」を見つけ、もはや大将殿とは暮らせないと、このまま別れる決心をした。
- ② おとどは、三条殿のことを心配して、大将殿に「消息たびたび聞こえ」たが、大将殿は全く返事をしないので、「かたくなしう軽々しの世や」と、大将という立場にそぐわない軽薄さを不愉快に思った。
- ③ 大将殿は、三条殿の家出を知り、三条殿父娘の短気で派手な性格を考えると、「ひがひがしきこと」をしかしかねないと驚いて、「暮らしてみづから参り給へり」と、すぐさま大殿へ迎えに行った。
- ④ 三条殿は、強気に帰宅を拒みながらも、思い切りのよい「すがすがしき御心」の大将殿ならば、ここにいる子どもたちまでも自分の手の届かない場所に連れて行ってしまいかねず、「あやふし」と危惧した。
- ⑤ 大将殿は、説得に耳を貸さない頑固な三条殿の手もとで育つことになる姫君の将来を心配して、「母君の御教へにな叶ひ給うそ」などと、せめて教訓を言い聞かせることで、父の役割を果たそうとした。

※

『源氏物語』〈夕霧〉の一節。（大学入試センター試験―本試験 平27）

【通釈】 三条殿は、「(夫との仲はこれで) 終わりであるようだ」と(思うとともに)、  
『『そのように(夫婦仲が終わってしまうだろう) か、いやそうなるはずがない』と、一  
方では(夫を) 頼みに思っていたが、『まじめな人が心変わりすると(元の女性には) 未  
練がなくなってしまう』と(噂に) 聞いていたのは、本当だったのだなあ」と、夫婦の  
仲の真実というものを見てしまった気持ちがして、「なんとかしてこの(夫の私に対する)  
無礼さを見ないようにしたい」とお願いになったので、(実家の) 父大殿の邸へ「方違え  
をしよう」といってお移りになってしまったのだが、(ちようどその時姉君の) 女御様が  
里に戻っていらつしやる時でもあり、(三条殿は姉君に) 対面なさって、(ここは) 少し  
沈んだ気分が晴れる場所だと思いいになって、いつものように急いでお帰りになること  
はしない。

大將殿も(三条殿が実家に帰ったということを) お聞きになって、「思ったとおりだ、  
実に短気なご気性でいらつしやる。この(三条殿の父の) 大殿も、また、年配者らしい  
落ち着いたところがやはりなく、ひどくせつかちで、(二人とも) 派手にふるまって事を  
荒立てなさる人たちであるので、『氣にくわない、(顔も) 見たくない、(声も) 聞きたく  
ない』などと、(私に対して) ひねくれたことなどをきつと言い出しなさるに違いない」  
と、(三条殿の突然の里歸りに) 驚きなさらずにはいられなくて、大將殿夫妻の邸にお歸  
りになったところ、子どもたちも何人かはとどまっていらつしやったので、(三条殿は)  
姫君たちとそのほかはごく幼い子を連れて(父大殿の邸に) おいでになった(その残り  
の子たちが)、(父君を) 見つけて喜んでじゃれつき、あるいは(母君を) 恋い慕い申し  
上げて悲しんでお泣きになるのを見て、(大將殿は)「かわいそうに」とお思になる。

(大將殿は三条殿に) 便りを何度も差し上げて、迎えに(使いの者を) 参上させなさ  
るが、(三条殿からは) お返事さえない。「こんなにも頑固で軽率な人だったのだなあ」  
と、不愉快に思われなさるが、(自分の腹立ちを) 大殿が見聞きなさることも懸念される  
ので、日が暮れてからみずからが(大殿の邸に) 参上なさった。(大殿邸に到着すると)  
「(三条殿は) 寢殿にいらつしやいます」と(女房が) 言って、(三条殿が実家で) いつ  
も使っていらつしやる部屋には、女房たちだけが控えている。若君たちは乳母のそばに  
いらつしやった。

(大將殿が)「今さらになって若い恋人同士のような付き合い方ですええ。このような  
(若い) 子を、あちらこちらに放って置きなさって、どうして寢殿で(女御様との) お  
しゃべりなど(なさっているのですか)。(あなたは私には) 不似合いなご気性だとは、  
長年見て分かっていました、しかるべき前世の因縁でしょうか、昔から(あなたから)  
離れがたいと思い申し上げて、今ではこのように多すぎるくらいに子どもが大勢いてし  
みじみとおおしいのだから、『お互いに(相手のことを) 見捨てることができようか、  
いやできるわけがない』と(あなたを) 頼みに思い申し上げているのですよ。(それなの  
に今回のような) 取るに足りない一件で、このように振る舞いなさってよいものでしょ

うか」と、ひどく軽蔑して恨み言を申し上げなさるので、

（三条殿は）「何もかも、『今となつてはもう（嫌になつた）』と（あなたが）見飽きなさつてしまつたこの身ですから、今さら、また、（あなたのお考えが）元に戻るはずでもないのに、『どうして（自分の性格を改められようか、改めても無駄なことだ）』と思ひまして。見苦しい子どもたち（かもしれないが彼ら）のことは、（あなたが）忘れずにいて下さいましたら、嬉しいことでしょう」

と申し上げなされた。

（大将殿は）「穏やかなお返事ですなえ。（このまま）言い続けていくと、だれの評判が落ちるのでしょうか（あなたの評判が落ちるだけですよ）」

と言つて、無理に「（私と暮らす家に）お帰り下さい」と言うこともなく、（大将殿は）その夜は一人でお休みになつた。

（大将殿は）「（落葉宮には疎まれるし、妻には家出されるし）不思議と身の置き所のないこの頃だなあ」と思いながら、子どもたちを前に寝かせなされて、あちら（の落葉宮）では、また、どんなにか（大将殿の訪れが途絶えたことを）思い悩んでいらつしやるかもしれないご様子を想像し申し上げ、気が休まることもなくあれこれ物思ひの限りを尽くすので、「（いったい）どのような人が、このような恋愛事をおもしろいと感じているのだろう」などと、（恋愛事には）懲り懲りになつてしまひそうに思われなさる。

夜が明けたので、「人が見聞したら大人げない（と思われそうな）ので、（あなたが）『（もう二人の仲は）終わりだ』ときつぱりとおつしやるのなら、そのように（別れて暮ら）してみましよう。あちら（の私と暮らす家）に残された年長の息子たちも、いじらしい様子で（あなたを）お慕ひ申し上げているようでしたが、（あなたが）選り残しなされたのには、『何かわけがあるのだろう』とは（私は）思うが、見捨てがたいものですから、ともかく何とか世話をいたしましょう」と、脅し申し上げなさるので、（三条殿は）「（大将殿は）思い切りのよいご気性で、この子どもたちまでも、どこか知らない所に連れていらつしやるのかしら」と、心配になる。

（大将殿は）姫君に、「さあ、こちらへおいでなさいな。（あなたに）お会いするため」にこのように（私がお母様の実家に）参上するのも体裁が悪いので、そういつもいつも参上することはいけません。あちら（の三条殿の邸）に（いる）子どもたちもいといので、せめて同じ所で（あなたも）お世話いたしましょう」と申し上げなさる。（姫君が）まだ大変幼くかわいらしくていらつしやるのを、「とてもいい」と見申し上げなさつて、「母君のお教えに従いなさいますな。本当に情けなく、分別のつかない心があるのは、実に困つたことなのです」と、言い聞かせ申し上げなさる。

【解答】 【問一】(7) ⑤ (4) ① (9) ④ 【問二】⑤ 【問三】③ 【問四】②

【問五】① 【問六】④



【通釈】 三条殿は、「(夫との仲はこれで) 終わりであるようだ」と(思うとともに)、  
『『そのように(夫婦仲が終わってしまうだろう) か、いやそうなるはずがない』と、一  
方では(夫を) 頼みに思っていたが、『まじめな人が心変わりすると(元の女性には) 未  
練がなくなってしまう』と(噂に) 聞いていたのは、本当だったのだなあ」と、夫婦の  
仲の真実というものを見てしまった気持ちがして、「なんとかしてこの(夫の私に対する)  
無礼さを見ないようにしたい」とお思いになったので、(実家の) 父大殿の邸へ「方違え  
をしよう」といってお移りになってしまったのだが、(ちようどその時姉君の) 女御様が  
里に戻っていらつしやる時でもあり、(三条殿は姉君に) 対面なさって、(ここは) 少し  
沈んだ気分が晴れる場所だとお思いになって、いつものように急いでお帰りになること  
はしない。

大將殿も(三条殿が実家に帰ったということ) お聞きになって、「思ったとおりだ、  
実に短気なご気性でいらつしやる。この(三条殿の父の) 大殿も、また、年配者らしい  
落ち着いたところがやはりなく、ひどくせつかちで、(二人とも) 派手にふるまって事を  
荒立てなさる人たちであるので、『氣にくわない、(顔も) 見たくない、(声も) 聞きたく  
ない』などと、(私に対して) ひねくれたことなどをきつと言い出しなさるに違いない」  
と、(三条殿の突然の里歸りに) 驚きなさらずにはいられなくて、大將殿夫妻の邸にお帰  
りになったところ、子どもたちも何人かはとどまっていらつしやったので、(三条殿は)  
姫君たちとそのほかはごく幼い子を連れて(父大殿の邸に) おいでになった(その残り  
の子たちが)、(父君を) 見つけて喜んでじゃれつき、あるいは(母君を) 恋い慕い申し  
上げて悲しんでお泣きになるのを見て、(大將殿は)「かわいそうに」とお思いになる。

(大將殿は三条殿に) 便りを何度も差し上げて、迎えに(使いの者を) 参上させなさ  
るが、(三条殿からは) お返事さえない。「こんなにも頑固で軽率な人だったのだなあ」  
と、不愉快に思われなさるが、(自分の腹立ちを) 大殿が見聞きなさることも懸念される  
ので、日が暮れてからみずからが(大殿の邸に) 参上なさった。(大殿邸に到着すると)  
「(三条殿は) 寢殿にいらつしやいます」と(女房が) 言って、(三条殿が実家で) いつ  
も使っていらつしやる部屋には、女房たちだけが控えている。若君たちは乳母のそばに  
いらつしやった。

(大將殿が)「今さらになって若い恋人同士のような付き合い方ですなあ。このような  
(若い) 子を、あちらこちらに放って置きなされて、どうして寢殿で(女御様との) お  
しゃべりなど(なさっているのですか)。(あなたは私には) 不似合いなご気性だとは、  
長年見て分かっていましたが、しかるべき前世の因縁でしょうか、昔から(あなたから)  
離れがたいと思ひ申し上げて、今ではこのように多すぎるくらいに子どもが大勢いてし  
みじみとおおしいのだから、『お互いに(相手のことを) 見捨てることができようか、  
いやできるわけがない』と(あなたを) 頼みに思ひ申し上げているのですよ。(それなの  
に今回のような) 取るに足りない一件で、このように振る舞いなさってよいものでしょ

うか」と、ひどく軽蔑して恨み言を申し上げなさるので、

（三条殿は）「何もかも、『今となつてはもう（嫌になつた）』と（あなたが）見飽きなさつてしまつたこの身ですから、今さら、また、（あなたのお考えが）元に戻るはずでもないのに、『どうして（自分の性格を改められようか、改めても無駄なことだ）』と思ひまして。見苦しい子どもたち（かもしれないが彼ら）のことは、（あなたが）忘れずにいて下さいましたら、嬉しいことでしょう」

と申し上げなされた。

（大将殿は）「穏やかなお返事ですなえ。（このまま）言い続けていくと、だれの評判が落ちるのでしょうか（あなたの評判が落ちるだけですよ）」

と言つて、無理に「（私と暮らす家に）お帰り下さい」と言うこともなく、（大将殿は）その夜は一人でお休みになつた。

（大将殿は）「（落葉宮には疎まれるし、妻には家出されるし）不思議と身の置き所のないこの頃だなあ」と思いながら、子どもたちを前に寝かせなされて、あちら（の落葉宮）では、また、どんなにか（大将殿の訪れが途絶えたことを）思い悩んでいらつしやるかもしれないご様子を想像し申し上げ、気が休まることもなくあれこれ物思ひの限りを尽くすので、「（いったい）どのような人が、このような恋愛事をおもしろいと感じているのだろう」などと、（恋愛事には）懲り懲りになつてしまひそうに思われなさる。

夜が明けたので、「人が見聞したら大人げない（と思われそうな）ので、（あなたが）『（もう二人の仲は）終わりだ』ときつぱりとおつしやるのなら、そのように（別れて暮ら）してみましよう。あちら（の私と暮らす家）に残された年長の息子たちも、いじらしい様子で（あなたを）お慕ひ申し上げているようでしたが、（あなたが）選り残しなされたのには、『何かわけがあるのだろう』とは（私は）思うが、見捨てがたいものですから、ともかく何とか世話をいたしましょう」と、脅し申し上げなさるので、（三条殿は）「（大将殿は）思い切りのよいご気性で、この子どもたちまでも、どこか知らない所に連れていらつしやるのかしら」と、心配になる。

（大将殿は）姫君に、「さあ、こちらへおいでなさいな。（あなたに）お会いするため」にこのように（私がお母様の実家に）参上するのも体裁が悪いので、そういつもいつも参上することはいけません。あちら（の三条殿の邸）に（いる）子どもたちもいといので、せめて同じ所で（あなたも）お世話いたしましょう」と申し上げなさる。（姫君が）まだ大変幼くかわいらしくていらつしやるのを、「とてもいい」と見申し上げなさつて、「母君のお教えに従ひなさいますな。本当に情けなく、分別のつかない心があるのは、実に困つたことなのです」と、言い聞かせ申し上げなさる。

【解答】 【問一】(7) ⑤ (4) ① (9) ④ 【問二】⑤ 【問三】③ 【問四】②

【問五】① 【問六】④